

## 一葉文学における朝鮮文学『九雲夢』の受容

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 政殷 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/29500">http://hdl.handle.net/2297/29500</a>

# 一葉文学における朝鮮文学『九雲夢』の受容

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻  
李 政 殷

## Acceptance of Korean Literature “*Ku-unmong*” in Ichiyo Literature

LEE JungEun

### Abstract

This report discusses the classic reception of Korean literature *Ku-unmong* in Ichiyo literature, which cannot be overlooked. It is an important study to follow previous works on the classic reception in Ichiyo literature and one which grasps reception relations of Korean literature *Ku-unmong*, and it is the study that there is on the extension line. Therefore, it may be said that the study of the reception of *Ku-unmong* in Ichiyo literature is an important one that was not conducted so far. Ichiyo transcribed *Ku-unmong* from the 24st of May in Meiji 25(1892) to the 29th of May in meiji 25. It is now possessed by the Yamanashi Prefectural Museum of Literature.

In *Ku-unmong*, one of the works read in “*Chunhyangjun*” (established in the 18th century), along with classic Korean novels, has attracted review of its representative works. Using this report, the original text that Ichiyo transcribed, seeks to clarify that it is “*Kyehyebon*”. In addition, it further elucidated the relationship of the reception of *Ku-unmong* in Ichiyo literature, demonstrating that *Ku-unmong* affected the Ichiyo novel “*Samidare*” “*Nigorie*” “*Hanagomori*”. In this report, I seek to shed light on the reception of *Ku-unmong* in Ichiyo literature through a study on Ichiyo literature.

### Key Words

Ichiyo, *Ku-unmong*, Acceptance

## 1. 序論

樋口一葉(1872～1896年)は、豊かな古典的教養に恵まれた作家であり、その影響は彼女の文学においても幅広く現れている。一葉読書目録を見れば、和歌、物語、江戸小説など、日本文学全般にかけて読んでいる。さらに、日本文学にとどまらず、『史記』『詩経』(中国)や『罪と罰』(ロシア)などの他国の文学にも触れており、一葉は幅広い文学的素養を身に付けた作家であることがわかる。特に朝鮮小説『九雲夢』(作者は金萬

重<sup>ジュン</sup>、生没年は1637～1672年)を読んだことはもちろん筆写までしており、その筆写本が遺されていることは注目すべきところであろう。明治20年代は、ロシア文学や中国文学とは違って、殆どの日本人は朝鮮文学について無関心であった。そのような時に一葉がわざわざ筆写するまでの関心を示したことは決して軽く考える問題ではない。

『九雲夢』といえば、朝鮮の後半期、巷間でもっとも好く読まれた作品の一つであり、『春香<sup>チュンヒョク</sup>伝<sup>デオン</sup>』(18世紀成立)とともに、韓国古典小説のなかで代表的作品として評価を受けている。それ

だけではなく、『九雲夢』の主人公に関するエピソードが『春香伝』にも登場するなど後世の作品に現れている。これは、『九雲夢』がどれだけ好まれたか予測できることである。朝鮮文学に対する一葉の関心は、朝日新聞の特派員として韓国（当時は朝鮮から大韓帝国にかわる過渡期）で活躍した経験など、韓国と深く関係していた小説の師・半井桃水(1861～1926年)の影響が強いことは言うまでもない。一葉が筆写した『九雲夢』も桃水から借りたということは一葉の日記からもわかる。

一葉研究において朝鮮文学の受容関係に関する研究はそれほど活発ではない。一葉文学において朝鮮文学『九雲夢』という作品をどのように受容したか、さらに一葉の小説の中ではどのように活かされたかについて焦点を当てた研究は殆んど見当たらないのが現状であるといえよう。その中で注目すべき研究が野口碩氏の『樋口一葉の「五月雨と朝鮮文学」』<sup>2</sup>と、伊藤慶子氏の『樋口一葉文学における韓国古典小説の影響』<sup>3</sup>である。前者は李朝小説『春香伝』『九雲夢』の影響がある点、特に『にごりえ』について『九雲夢』と共通する点があると論じた研究であり、後者は半井桃水が韓国古典小説『九雲夢』と『春香伝』を土台にしたと考えられる『胡砂吹く風』<sup>4</sup>を通して『九雲夢』と『春香伝』に関する一葉の理解とその文学に及ぼした影響を論じている。

本稿では、上記の研究を踏まえ、一葉が読んでまた写した『九雲夢』の原典は何かを確認する。また『九雲夢』は一葉の作品にどのような影響を与えたかを解明した上で、一葉文学における朝鮮文学『九雲夢』の受容関係を明らかにする。本論の試みにより一葉文学における朝鮮文学『九雲夢』の受容という新しい課題を一葉研究界に提示したい。

## 2. 一葉と朝鮮文学との出会い

一葉の朝鮮文学に対する関心が、小説の師・半井桃水によったということは前述の通りである。

一葉の姉・邦子の友人である野々宮菊子の紹介を経て一葉が半井桃水に出会ったのは、明治24年4月15日のことである。次いで同5月27日、初めて前日に約束した小説の原稿を持参し桃水を訪ねた時、「朝せん元山の鶴」を食べたという記事<sup>5</sup>が登場する。さらに朝鮮釜山からの書状や朝鮮からの友人が桃水を訪ねたという記事<sup>6</sup>から、一葉は朝鮮と関連した国の状況まで関心を寄せたことがわかる。この朝鮮に対する関心は、桃水との決別後にもしばしば関心を向けていた記事からうかがわれる。要するに、桃水によって出会った朝鮮は、その文学にも深く関係していたといえよう。

さて、『九雲夢』を筆写した記録が一葉の日記に現れるのは、明治25年(1892)5月24日から29日にかけてである。次の日記をみてみよう。

- 廿四日 雨いたく降る。『九雲夢』書写す。十葉計。
- 廿五日 雨いと / \ つよく降る。午前の内『九雲夢』十葉計うつつして、夫より小説草稿かゝる。今日の『改進新聞』に『むさしの』二編の評をのせたり。
- 廿六日 連日の雨晴る。早朝より『九雲夢』書写す。
- 廿七日 大雨。『九雲夢』書写。此夕ベ半井君より手紙来る。
- 廿九日 早朝直ちに小石川病人を訪ふ。正午時まで居る。此間に小がさ原家及伊東老母、見舞に来る。一時帰家して『九雲夢』少し写す。更に夕がたより小石川へ行く。

前述したように、この『九雲夢』は、半井桃水から借りたものであろう。かつて、桃水は『九雲夢』を受容し、長編『胡砂吹く風』を「東京朝日新聞」に連載したが、その後、一葉の『九雲夢』筆写の記録があるので、一葉は『九雲夢』の筆写の前から『九雲夢』を知っていた可能性が高い。そして、ほぼ毎日時間をかけて書き写していることから、一葉の『九雲夢』に対する関心は大変大き

かったようだ。これに関して塩田良平<sup>7</sup>氏は、「恐らく、桃水が釜山にあつた時入手し、この梗概を一葉に語りきかせたのであらう。ちなみにこの作品は『胡砂吹く風』に引用されてゐる」と認めながらも「樋口家に一葉書写の本書一点が存在するが、原文句読訓点なく難解し得たか如何かはわからない。しかし、経典を移すような気持で筆写したに違いない。筆写態度は一字一劃を忽にせず甚だ謹厳である。猶九雲夢の筆写はこの後も日々続いているが、桃水と別離の際、原本は返却したらしい。しかし、一葉の小説中、かかる伝奇的構想からヒントを得たらしいとは思わせるものを見ないから、この書は単に彼女の知識として止まり、その作風には影響を与えなかつたもと認められる」と述べている。塩田氏は『九雲夢』は一葉の文学には何の影響もないという立場に立っているようである。

しかし、たとえ、一葉が『九雲夢』の原文を理解していなかつたとしても、桃水がその内容について詳しく語らなかつたはずはない。また、『九雲夢』の影響を「伝奇的構想」という型式的な面からのみ考えて判断した塩田氏の見解は問題があると思われる。また、一葉にとって書き写しの習慣は学習方法の一つであつて、一葉が書き写した文学作品は一葉の作品中でその影響が現れてくるので、『九雲夢』を筆写ということも何の目的もないことではないであらう。

一葉が、既に『九雲夢』について知っていたと考えられるもう一つの理由がある。それは、小宮山天香（1855～1930年）の存在である。桃水の友人であつた彼を尊敬すべき良師であるからと、一葉に紹介したのである<sup>8</sup>。一葉の日記では「小宮山」「即真居士」という名前で登場しているが、その印象を「たけたかやかならず、こえ給はず、人がらいとおだやかにみうけ侍り」（明治24年5月8日）と記している。

この小宮山といへば、後日、『九雲夢』を『夢幻』というタイトルで翻案した人物である。前編は明治27年9月から25回、後編は明治28日から28回にわたつて「東京朝日」に連載したのだ。この

ように、一葉の身のまわりの環境から、朝鮮文学『九雲夢』が一葉に及ぼした影響は想像以上に大きかつたのではないか。

それでは、一葉はなぜ『九雲夢』を筆写しようと思つたのであらうか。桃水は、かつて朝鮮文学の一つである『春香伝』を翻訳し、『雉林情話春香伝』という名で「大阪朝日新聞」に明治15年6月25日から7月23日まで20回にわたつて連載した。もちろん一葉も読んだはずである。ここで考えられるのは、あくまでも仮定であるが、桃水の翻訳によつて『春香伝』を読んでいたが、『九雲夢』はまだ読んでいない可能性である。つまり、桃水が連載した『胡砂吹く風』を読んでいくうちに、一葉は既に聞いていた『九雲夢』について関心が高まり、実際読んでみるつもりで筆写するようになったのではないか。とすれば一葉にとって『九雲夢』はそれほど魅力ある作品であつたということになる。

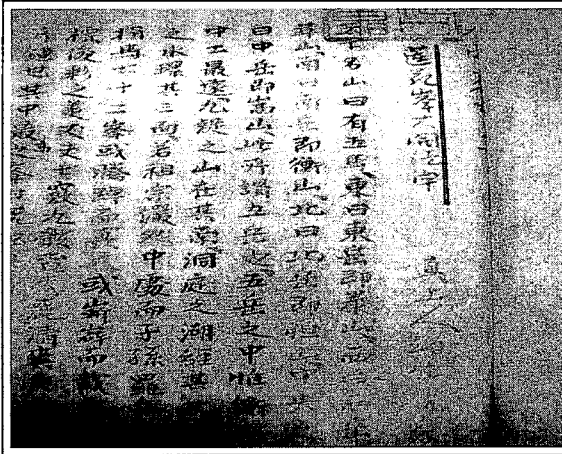
### 3. 一葉の写した『九雲夢』の原典関係

『九雲夢』の成立時期ははっきりしていないが、漢文本とハングル本が存在している。一葉の写稿『九雲夢』は山梨県立文学館に所蔵されている。これは漢文体である。前記したように、その一部のみが遺されている。一葉の写した『九雲夢』を確認した結果、その内容は『九雲夢』第3巻の後半まで<sup>9</sup>である。一部だけが残されている理由はいったい何か。『九雲夢』の第3巻の最後までしか写しておらず第3巻後半の途中で切れている。また、最後のページを詰めに余白に置いた状態である。

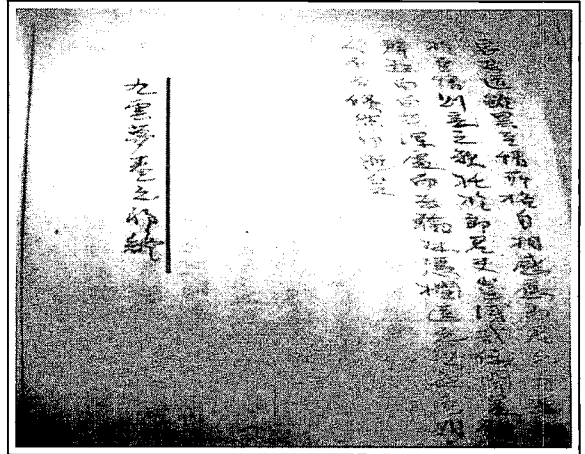
このようなことから一葉の写した『九雲夢』の後半部は紛失ではなく何らかの事情で一葉の意志によつて途中で止めたと考えられる。

表1 一葉の『九雲夢』の巻之二と「乙巳本」と「癸亥本」との比較 (傍線は筆者)

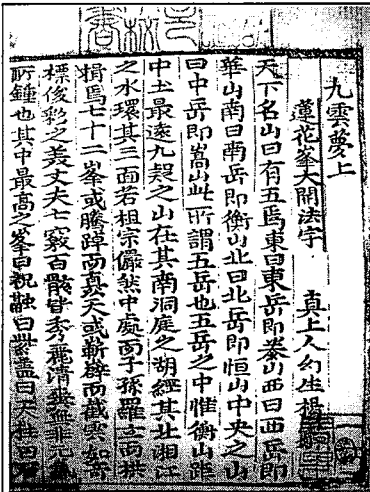
P1 一葉の写稿『九雲夢』巻之一 山梨県立文学館所蔵



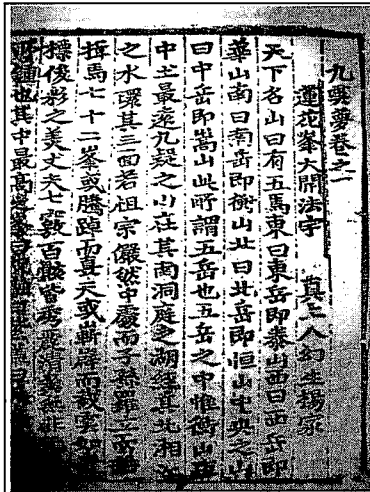
P2 一葉の写稿『九雲夢』巻之二 山梨県立文学館所蔵



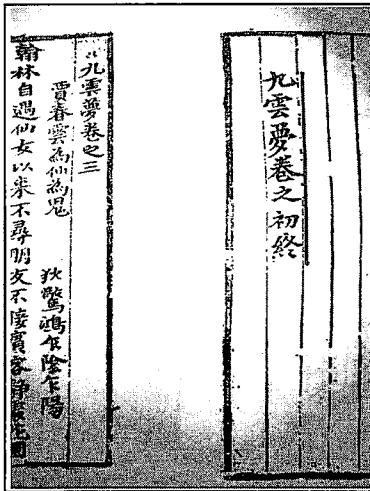
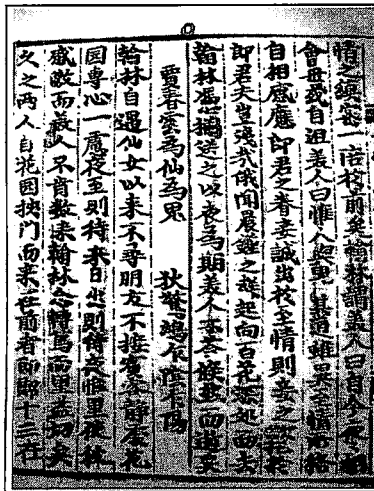
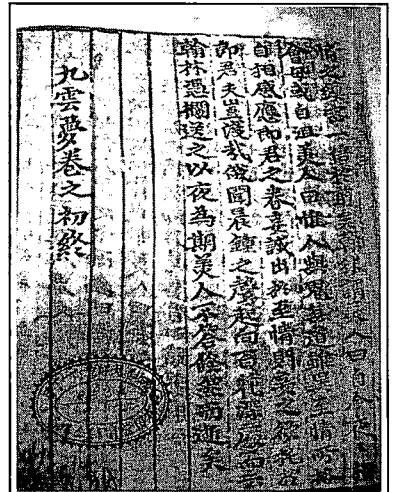
P3 「乙巳本」の『九雲夢』上  
ソウル大学中央図書館所蔵



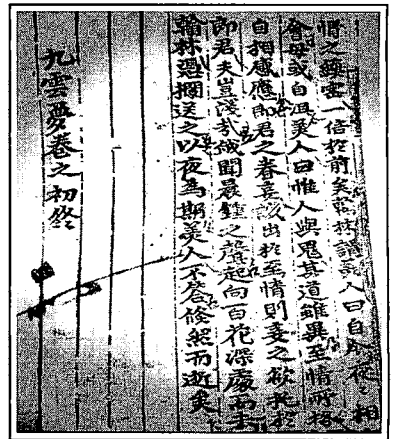
P4 「癸亥本」巻之一、二  
丁奎福(ジョンギョボク)氏の所蔵本



P5 「癸亥本」  
高麗大学院図書館所蔵



P6 「癸亥本」  
韓国国立中央図書館所蔵



ちなみに、一葉が『九雲夢』を写したという記事は、明治25年5月24日から29日にかけてである。その後日、6月22日に「半井うしのもとに返すべき書物もて行」という記事がある。これが『九雲夢』である可能性は高い。この22日は一葉と桃水との絶交の日であることから一葉は全編の筆写まではできず、途中で止め急いで『九雲夢』を返したと考えられる。

さて、漢文本『九雲夢』の原典は大勢の読者を抱擁したため、時期により、また地域により読者の好みに合わせた異本群が形成された<sup>10</sup>。その異本群に大きく分けると、「老尊本」（1725年以前）系列と、その「老尊本」に手が加えてある「蓮花本」系列に分けられる。これは、『九雲夢』の最初が「老尊師……」「蓮花峯……」で始まるテキストを指す。ここで、一葉が筆写した『九雲夢』は「蓮花峰……」と始まる（表1-P1）ので、異本は「蓮花本」の系列だというのは確かなことである。ただし、この木版本「蓮花本」はさらに二つに分けられるが、1725年版（「乙巳本」）と1803年版（「<sup>ウルサボン</sup>ゲヘボン」）である。かつて野口碩氏は、「一葉が写したのは「乙巳本」と呼ばれる漢文本であった」と指摘した。野口氏の研究に基づき、すでにもっとも古い韓国ソウル大学所蔵の『九雲夢』（乙巳本、表1-P3）と一葉の筆写した『九雲夢』との比較を行った。その結果「蓮華峰…」から始まる冒頭は一致しているが、巻之二の部分に多少差があることがわかった。もし一葉の写稿が「乙巳本」ではないとすれば、一葉の写した『九雲夢』は「癸亥本」であることを意味するのではないか。そこで「癸亥本」（表1-P4）と一葉が写したものととの比較も行ったが、一つの興味深い事実を確認した。一葉が筆写した『九雲夢』の2巻の最後の空白に「九雲夢巻之初終」（表1-P2）という文字が書いてあるが、それは「癸亥本」とまったく同じである。他の木版本もいくつかを確認してみると、確かに2巻の空白には同じく「九雲夢巻之初終」（表1-P5, 6）となっており、「乙巳本」にはないものである。要するに、一葉の『九雲夢』は野口氏が指摘した「乙巳本」で

はなく「癸亥本」である可能性が高い。

しかしながら、この結果だけでは説得力が足りないため、もっと立証すべき根拠を提示しなければならぬであろう。「癸亥本」は「乙巳本」を祖本として復刻されたもので、「乙巳本」に比べて誤字・脱字が増えており、さらに場面の脱落も生まれた。というものの、この「癸亥本」は一番大勢の読者に広く読まれたし、この「癸亥本」が祖本になってハングル本もできた<sup>11</sup>とされる。

本稿では、一葉が写した『九雲夢』が「乙巳本」であるか、それとも「癸亥本」であるかが立証できる決定的な根拠について二つの点を考えたい。その一つは、主人公が後半部で大きく悟るという「大覚」の場面の有無である。この場面は「乙巳本」にはあるが、「癸亥本」には脱落されている。もう一つは、誤字の比較である。つまり、一葉の『九雲夢』と「乙巳本」と「癸亥本」との比較を行いその違いを判断することである。

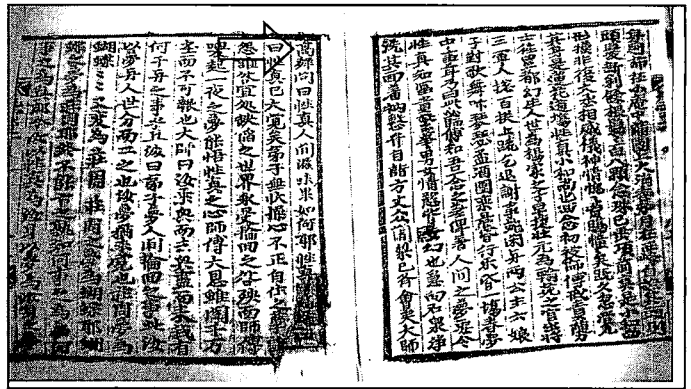
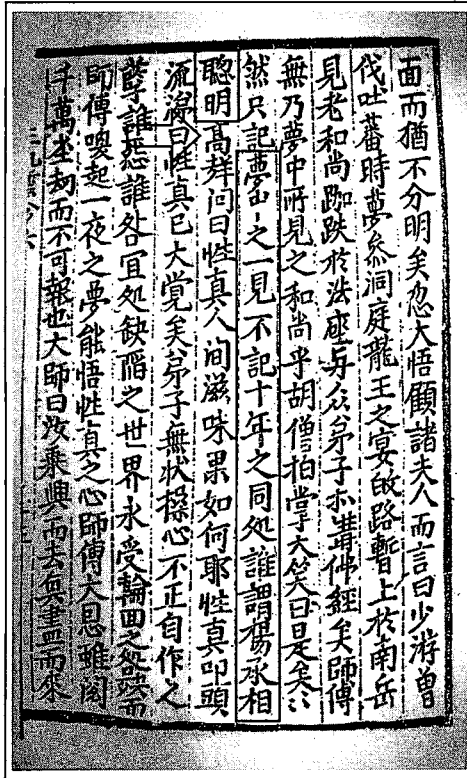
まず、「大覚」の場面であるが、『九雲夢』の主人公である性真が楊少遊で生まれ変わり、紆余曲折を経て富貴と栄華を極めてはじめて人生の一場の春夢を悟るという部分を指している。「乙巳本」が「癸亥本」に復刻される当時、いわゆる「大覚」の場面が、板刻者の不注意のため、脱落になったとされる。

次の「乙巳本」と「癸亥本」の「大覚」の場面をみてみよう。

表2 「癸亥本」と「乙巳本」との「大覚」の場面

「癸亥本」丁室福氏の所蔵本

「乙巳本」ソウル大学中央図書館所蔵



確かに、「乙巳本」には「大覚」の場面が存在するが、「癸亥本」には一枚の量が脱落されている。この「大覚」の場面の有無によって一葉の写した『九雲夢』は「乙巳本」なのか、それとも「癸亥本」なのか解明できるのだが、残念なことに一葉はこの「大覚」の場面まで行かず、第3巻の後半で筆写をやめたのでこの「大覚」の有無は判断できない。それでは、一葉の写した『九雲夢』が「癸亥本」だという根拠はもう一つの誤字の比較から探るしかない。

韓国でも、この誤字・脱字の箇所について研究がなされているが、ここでは一葉の『九雲夢』と「乙巳本」を比較して、誤字はないのか、あるとしたらその誤字は「癸亥本」と違っているのか、それとも、「癸亥本」とは同字であるかを調べてみたい。

一葉の写した『九雲夢』は第3巻までだという

ことは、前述した通りである。第1巻の部分では大きい差はないのだが第2巻からは誤字がみえた。【表3】を見てみると、一葉の写した『九雲夢』には「郷」になっているのが、「乙巳本」には「娘」になっているのがわかる。ところが「癸亥本」には一葉の『九雲夢』と同じように「郷」になっている。次の第3巻では誤字だというより、表記の違いがあるのだが、ここでも一葉の『九雲夢』と「乙巳本」との表記の違いはあるが、「癸亥本」とは全く同じであることがわかる。

つまり、一葉の『九雲夢』の文字が「乙巳本」とは違っても「癸亥本」とは同じ文字であることは、前述した2巻の最後の空白に「九雲夢巻之初終」の有無とともに、一葉の写した『九雲夢』は「癸亥本」であることを意味するのではないのか。

表3 一葉の写した『九雲夢』と、「乙己本」と「癸亥本」の異字の比較

一葉の『九雲夢』

乙己本 卷二、卷三

癸亥本 卷二、卷三

走海鴻馬之奔川諸生見其詩思之敏捷筆勢之飛  
動莫不驚訝失色矣楊生擲筆於席上謂諸生曰  
先請教於諸兄而今日座中林卿即考官也約卷時  
劉恐不及也即送其詩箋於林卿其詩曰  
蓬窗西遊入秦酒樓來醉落陽春月中丹桂  
枝

走海鴻馬之奔川諸生見其詩思之敏捷筆勢之飛  
動莫不驚訝失色矣楊生擲筆於席上謂諸生曰  
先請教於諸兄而今日座中林卿即考官也約卷時  
劉恐不及也即送其詩箋於林卿其詩曰  
蓬窗西遊入秦酒樓來醉落陽春月中丹桂  
枝

空養生拙其一幅縱橫走筆題三章詩比如風掃之  
走海鴻馬之奔川諸生見其詩思之敏捷筆勢之飛  
動莫不驚訝失色矣楊生擲筆於席上謂諸生曰  
先請教於諸兄而今日座中林卿即考官也約卷時  
劉恐不及也即送其詩箋於林卿其詩曰

下伏以倫義者王孫也本為婚者人倫之始也  
一失其本則風化大壞而其國亂不謹其始則家  
道不成而其家亡有關於家國之興衰者其較  
著者是以聖王哲辟未嘗不留意於是欲治其國  
必以禮倫紀為重欲齊其家必以定婚媾為先者  
何莫非端本始而後明微之意也臣既已  
納幣於鄭方且已托爾於鄭家則固宜有禮也  
口：始疑終惑慮駭悚惶惶不知聖上之舉措明  
家庶分求能盡其禮而得其實也故令臣未敢

入尚書五刑憤氣騰騰應擬極長好難辭補  
已乃上一疏言甚敬切等語曰  
禮部尚書臣揚小游謹頓首有拜上言于聖帝  
下伏以倫紀者土政之本也婚媾者人倫之始也  
一失其本則風化大壞而其國亂不謹其始則家  
道不成而其家亡有關於家國之興衰者其較  
著者是以聖王哲辟未嘗不留意於是欲治其國  
必以禮倫紀為重欲齊其家必以定婚媾為先者  
何莫非端本始而後明微之意也臣既已  
納幣於鄭方且已托爾於鄭家則固宜有禮也

口：始疑終惑慮駭悚惶惶不知聖上之舉措明  
家庶分求能盡其禮而得其實也故令臣未敢  
皮之幣不作明証之客漢賤而地微才瀟而學疎  
則寔不合於錦繡之秋採而况與鄭女已有怙儀  
之義與婦翁已定異錫之令不可謂上禮之未行  
也豈可以貴份之尊下嫁於匹夫之微而不問禮  
之可否不分事之輕重冒苟且之譏而行非禮之  
禮乎至我密下內旨使之廢已行之禮儀遂已擇  
之聘幣非且彼聞也臣恐陛下未能放先帝持  
宋私之寬也賤臣危迫之忱已關於聖明之聰鄭  
女窮感之情係於私家之事臣固不敢更思於  
結縵之下而臣之所恐者手政由臣而亂人倫固

不可謂六行之未行也豈可以貴份之尊下嫁於匹夫之微而不問禮之可否不分事之輕重冒苟且之譏而行非禮之禮乎至我密下內旨使之廢已行之禮儀遂已擇之聘幣非且彼聞也臣恐陛下未能放先帝持宋私之寬也賤臣危迫之忱已關於聖明之聰鄭女窮感之情係於私家之事臣固不敢更思於結縵之下而臣之所恐者手政由臣而亂人倫固

有禮也至聖者禮之始也禮之始也  
臣：若起於禮則禮之始也禮之始也  
家庶分求能盡其禮而得其實也故令臣未敢  
口：始疑終惑慮駭悚惶惶不知聖上之舉措明  
家庶分求能盡其禮而得其實也故令臣未敢

口：始疑終惑慮駭悚惶惶不知聖上之舉措明  
家庶分求能盡其禮而得其實也故令臣未敢  
口：始疑終惑慮駭悚惶惶不知聖上之舉措明  
家庶分求能盡其禮而得其實也故令臣未敢

#### 4. 『九雲夢』の受容関係

『九雲夢』の作者である金萬重は、号を西浦といい、裕福な両班の家庭で生まれ文科に及第するが、波乱の官職の生活を送る中、配流の身となる。それを案ずる母を慰めるために書いたのがこの『九雲夢』である。内容を簡単に紹介すると、六観大師の弟子である主人公性真は、八仙女と遊んでから娑婆世界を恋い、その罪として人間界に落とされ楊少游という名前で生まれ変わる（実際には大師の術により夢を見ている）。楊少游は幼い時から才能があり文科に及第し、国の乱を鎮圧するなど武功を立てその功で丞相になりまた鮒馬（王女の嬪）となる。彼は八仙女の後身である八人の女性と次々と出逢い、妻と妾として迎え富貴栄華の人生を送る。しかし、人生の無常を悟り夢から覚めた後は仏教に帰依し極楽浄土に入る、という内容である。

ここで、『九雲夢』の「九」は楊少游と八仙女を指していることで、この世に生まれ変わった八人の女性は、次の【表4】の通りである。

表4 『九雲夢』に登場する8人の女性

八人の女性	身分
①鄭瓊貝(チョン・ギョンベ)	鄭司徒の娘、楊少游の第一夫人
②李籥和(イ・ソファ)	皇帝の妹、閔陽公主、楊少游の第二夫人
③秦彩鳳(チン・チェボン)	秦御史の娘、閔陽公主の侍女、楊少游の第一妾
④賀春雲(カ・チュンウン)	鄭瓊貝の侍女、楊少游の第二妾
⑤杜鶴月(ケ・ソムオル)	清陽の名妓、楊少游の第三妾
⑥狄鸞鴻(チク・ギョンホン)	河北の名妓、楊少游の第四妾
⑦沈雲娘(シム・ヨヨン)	吐瀉の刺客、楊少游の第五妾
⑧白綾被(ベク・ヌンハ)	竜王の娘、楊少游の第六妾

このように、『九雲夢』は、「さまざまな人物を登場させ、浪漫的手法で彼らの性格を鮮やかに描き、人物相互の複雑な関係によって作品に深みを与え、構成と筋の運びを立体的に仕上げた」<sup>12</sup>作品であり、その構成力は『九雲夢』のもった素晴らしさでもある。

一葉文学における『九雲夢』の受容関係に関しては、三つの作品からその手掛かりとなることを押さえることができるのだが、野口氏を取り扱った『五月雨』と『にごりえ』との関係、もう

一つの作品『花ごもり』との関係を確かめることにする。

##### 4.1 『五月雨』と『九雲夢』

『五月雨』(明治25年7月23日、『武蔵野』)は、富家の娘である梨本優子は、容貌よしであるが、その侍女お八重は一歳年下で、優子からは本当の姉妹として扱われている。優子とお八重という二人の娘から慕われた杉原三郎は、どちらの恋にも応えないまま出家するという物語である。

お八重は、三郎とは筒井筒の関係で三郎が上京すると、後を追って自分も上京して今までその恋を守って来たのである。三郎はお八重と優子の懇意をしり二人の女性の間で苦悩する。しかしながらお八重は恩ある優子のため、今までひたすら操をたて守って来た恋をあきらめる。ここでは、単なる主従関係ではなく、お八重は乳姉妹として大事にしてくれた優子に対し恩返し的心情で三郎への恋をあきらめたのであろう。お八重の行動から考えてみると、『五月雨』では、女同士の「義理」または「友情」という形が重視されている。

この杉原三郎を恋する優子とお八重に似ているのが、『九雲夢』での鄭瓊貝とその侍女賀春雲との関係である。春雲は瓊貝の父鄭司徒に仕えた家来の娘で、父が十歳に病死したため、司徒夫妻が憐れみ引き取って娘と一緒に育ててきた。まさに姉妹のようである。才の優れた春雲は楊少游と鄭瓊貝の間で結びの助力者として働く。

また、『九雲夢』では李籥和と秦彩鳳の間にも、優子とお八重と同じような関係が成り立っている。秦彩鳳は、楊少游と婚姻の契りをしたが、父秦御史の謀反の罪により官妃となり、後に宮殿で楊少游と再会する憐れな女性である。この「楊少游に再会した時の意志を遂げられない悲しみが描写される」<sup>13</sup>点が、『五月雨』のお八重の心境に似ている。後、李籥和の協力により楊少湯と秦彩鳳は婚姻することになるが、女性間の義理が読める。

このように、鄭瓊貝と賀春雲、李籥和と秦彩鳳という関係は、女性の義理を現わしているので、

『五月雨』の優子とお八重との関係に影響を与えたかもしれない。さらに、『九雲夢』の中では、この四人の関係だけではなく、八人の妻妾が姉妹の義を結び合うという構成を現わしているのも、一葉が『九雲夢』の女性達の義理に目を当て作品の中で描いたということは特に注目すべきところであろう。

#### 4.2 『にごりえ』と『九雲夢』

一葉の作品の中で登場するヒロインはしばしば零落の娘（ないしは孤児）である。そしてそのヒロインが初期作品群では空想的零落の娘が多いに對して後半期作品群は近代社会の影が見られる現実的零落の娘に変わっていくのがその特徴である。特に『にごりえ』のヒロインであるお力は、作者一葉のもった零落の体験が反映され、リアリティを持っており、その性格はたまたま人生無常にもつながる。この零落の状況は『九雲夢』の中でも現れるが、それは作者である金萬重の身の上と深く関係するのであろう。つまり、裕福な両班家の生まれでありながらも流罪の身となった作者自らの零落の体験は、父秦御史の謀反の罪により官妃となり、父が非命に逝った後、邸や田地などの全身代を没収され一朝にして支えを失っただけではなく、身動きも自由を奪われてしまう秦彩鳳という人物にそのまま映されているのだ。

この零落の意識は、『九雲夢』の桂蟾月からもうかがわれる。特に、楊少遊と洛陽の名妓桂蟾月との出会いは、没落した家のことで挫折していく身の上を打ち明ける「結城朝之助とお力一貴公子と妓女の出会という発想にヒントを与えた」<sup>14</sup>のではないと思われるほど、その状況はよく似ている。

特に『にごりえ』のお力と『九雲夢』の桂蟾月、二人のヒロインのもった気高い性質、その反面強いコンプレックスともいえる身の上に対しての意識は同様である。『にごりえ』のお力は、お客さんに対して愛想があるどころか、我まま至極の身の振る舞いさえを取っており、銘酒屋の娼婦という世界では珍しい性格の持ち主である。にも

かかわらず、お力は銘酒屋の一枚看板になっている。『九雲夢』では楊少遊が昔から帝王の治めてきた土地洛陽の風景をみて回ろうとおもい向かった時、豪壮華美な御殿構えの建物の中に入ったが、その宴会で、妓女たちはおのおのがもっとも得意としている技をもって競い合うかのようにいっせいに歌ったり、鳴らしたり、弾いたりしていたが、その中でただ一人だけは一指も動かさず端然と座っている桂蟾月の描写があるが、確かに『にごりえ』のお力とよく似ている。

この場面の桂蟾月についての描写を引用すると次のようである。

その中のただひとりのだけは一指も動かさず端然と座っていた。賓客をもてなして媚びるのでもなく、技を見せびらかそうとはしゃぐのでもなかった。話もなければ、もちろん歌いもしなかった。妓生たちをずっと見まわしていた少遊の視線が気位の高そうなこの妓生のところに止まった時、少遊はほんとうの国色をそこに見出したような気がした。

この描写のように、気高い持ち主でありながら、「賤しい身の上」と言っているお力と同じように、蟾月も「汚らわしい女」と自ら身の上に対し挫折し、口癖のように言っている。この二人の共通点は、楊少遊が蟾月の家に招かれ、その夜、寝物語りに自分の身の上を打ち明ける場面では、内容の同異は別として、その描写は、非常に一致しているのだ。

先ず『九雲夢』では、次のように描写されている。

ふとんの中の蟾月は、少遊の耳に寄せて、ひそひそとこうつぶやいた。

「もう、すべてをさしあげたわたしですもの。わたしのあゆんできた過去を洗いざらしお話し申しあげようと思います。聞いてくださいますか？ 哀れとお思いでしたら同情してくださいませ。私はもと韶州の者です。父はそこで小

吏をしていましたが、不幸にも他郷の旅先で死にました。残されたものといえば、貧乏しかありませんでした。柩を運ぼうにも金につまり、また葬式を行うにも、やはり先立つものがなく、継母は窮余の策としてわたしを売って百両にかえたのです。それから後の苦しさは、貴方様もご推察できるでしょう。恥を忍び、苦しさを耐えての四、五年間は悲しさに打ちかって、お客様にまめまめしくつとめてきました。この世に神仏がおおせば、きっといつかはいいお方にめぐりあえると信じこんで、みずからを慰めてきたのです。(略) 今晚、はからずにも、わたしの念願がかなえられてこんなに楽しい一時をあなた様とすごさせていただきました。もしも、汚らわしい女だと遠ざけられないのなら、飯炊き女中としても、一生をお側で仕えたいと思っています。いかがでしょうか。」(『九雲夢』<sup>15</sup>)

これは、『にぎりえ』のお力が、結城朝之助に自分の素性や祖父、父から続く不運な宿世をすっかり語り一夜をともにするという状況と一致する。『九雲夢』の中からその内容を確認すると、次の通りである。

そもそもの最初から私は貴君が好きで好きで、一日お目にかからねば恋しいほどなれど、(略)親父は職人、祖父は四角な字を読んだ人でござんす。つまりは私のやうに気違ひで、世に益のない反古紙をこしらへしに、版をばお上から止められたとやら、ゆるされぬとかにて、断食して死んださうに御座んす。十六の年から思ふ事があつて、生れも賤しい身であつたれど、一念に修業して、六十にあまるまで仕出来したる事なく、終は人の物笑ひに、今では名を知る人もなしとて、父が常住歎いたを子供の頃より聞知つて居りました。私の父といふは、三つの歳に椽から落て片足あやしき風になりたれば、人中に立まじるも嫌やとて居職に飾の金物をこしらへましたれど、気位たかくて人愛のなけれ

ば最負にしてくれる人もなく、(略)貧乏人の娘、気違ひは親つづりで折ふし起るのでございます。(略) その父親は早くに死くなつてか。母さんが肺結核といふ煩つて死くなりましてから、一周忌の来ぬほどに跡を追ひました。『にぎりえ』<sup>16</sup>

このように、二つの作品でお力と蟾月の打ち明けは、その話があまりにも写実的である。特に、お力は一葉の作品の中で登場する零落の娘とは違う近代社会が生み出した新しい零落の娘であり、孤独の娘でもあるといえる。これは、王朝文学の零落の娘の空想的、浪漫的なところが現実的に変化したということであろう。また、『にぎりえ』と『九雲夢』の時代は、それぞれ違うにもかかわらず、その描写においては、『にぎりえ』のお力も、『九雲夢』の蟾月もその悲惨な現実ハリアリティを持つ。もちろん、桂蟾月は楊少游との恋の成就を成し幸せな結びを得るのだが、お力は恋の成就までは至らず死ぬという悲劇的なヒロインで終わる。この結末だけを考えると、確かに二つの作品は相反していると言える。だからこそ一葉のみの『九雲夢』の受容方法がみえてくるのではないか。つまり、『九雲夢』の桂蟾月から共感を受けながらも、桂蟾月とはまた違う『にぎりえ』のお力のことを描いていたのは、『にぎりえ』で「伝統的和歌の世界を踏まえながらも、小説という近代文学において新たな「厭ふ恋」を築き活かした」<sup>17</sup>創作手法が、一葉文学における古典の受容の方法であったのと、一脈通ずるところである。

#### 4.3 『花ごもり』と『九雲夢』

『花ごもり』<sup>18</sup>は、「山の手の手去る法学校」を卒業し、そこの出版部に勤務する瀬川与之助は母お近と父方の従妹お新の三人で本郷に住むという状況からストーリーは展開されていく。与之助は両親のいないお新と夫婦になって家庭を作る予定であったが、某次官の令嬢お広との縁談が舞い込むようになる。母お近は瀬川家のため、また与之助

の将来のため、お新との縁を切りこの縁談を進める決心をする。

特にこの作品では、母お近の、息子の出世と家の繁栄のためという心情が写實的に描かれているとされるが、次の通りである。

それが、真実か、さても若き了簡よな。さればこそ母が行末を案じて、亡き後までを気遣ふは夫ゆゑ、うき世を机の上の夢に見て、重き物は六寸の筆より外もたず、書物によまれて我が心なき人は夫れも道理か、其心にて押ゆかば、事成就の暁は幾つまづきの後なるべき、東照宮様御遺訓に重荷を負いて遠路を行くが如しと有りけれど、恐らくは半道も三分一もえ行かぬほどに投げ出して閉口せねば成るまじ、我れは我れによりて事を為すとは、さても立派の言の葉ながら聞けよ与之助、汝ほどの学識は広き東京に掃くほどにて、塵の塚の隅にもごろごろと有るべし、いづれも立身出世の望みを持たぬはなく、各自ことは易りて、出世の向きも種々なるべけれど、名を揚げ家をおこしてなど、これを誰しも基本なり。(『花ごもり』<sup>19</sup>)

このように、お近は、現在の与之助の境遇を冷静に把握し、立身出世のためには、次官の令嬢お広と結婚しなければならぬと、続けて与之助を説得していく。これは、戦乱によって楊少游の処遇を心配した母柳氏が、息子の将来のために、早く婚約する事を促すが、楊少游は、今は離れ離れになっているものの、秦彩鳳と婚姻の契りを守っていると、母に告げる。それを聞いた母は、再び秦彩鳳との縁を切り、他の縁に逢うことを呼びかけるという『九雲夢』と近い。次を見てみよう。

「そなたはまだ少年の身、いまから功名に急ぐことはありません。(略)そなたの配偶者になれるような女を、この母はまだ、見つけたことはありません。そなたもすでに十六です。けっして早いほうとは言えません。(略)」

その話を聞いて、柳氏の表情は別人のように

変わった。今まで、愛する我が子の晴れやかな花嫁の姿をまぶたにえがいていただけに、逆徒の娘となってしまった彩鳳との因縁は、この上になく悪縁としかとれないのだった。柳氏は眉をひそめて、いまおましげに舌打ちしながら、少游にこう言って聞かせた。

「おまえと言いかわしたという女は美しいかはわかりませんが、吉縁ではありません。あんなにまいましい禍の家に生まれては、命を完うすることさえむずかしいでしょう。また、よしや生き延びたとしても、ろくなことはありません。それに、いつ会えるかもわからないんだから、つまらないことにこだわって、あたら一生を棒にふるんじゃないよ。ほかに、似合いの家柄と婚姻を結び、この老いさき短い母を安心させておくれ。わかったかね。少游」

少游は母のことばに従うことを誓った。

ここで、描写される『花ごもり』のお近と『九雲夢』の柳氏は、その立身への心、世道観などが似ている。要するに、息子の出世のため、婚姻の縁を契った相手と別れるように妨害の役割を果たしているのである。とくに、一葉の作品の中でお近のような働きをする人物は珍しく、その心情の描写は非常に写實的である。『花ごもり』のお近という独特な人物像を、『九雲夢』の柳氏から求めるのは、言い過ぎかもしれないが、このお近と柳氏は類似点を持っているという解釈が許されるのなら、これは非常に興味深い内容であるといえるだろう。

以上一葉の『五月雨』『にごりえ』『花ごもり』の3作品を中心に、『九雲夢』の影響をたどりながら、その受容関係を調べてみた。一葉は全体的なストーリーを中心にするより、『九雲夢』に登場する人物それぞれのエピソードや人物関係などに目を当て、自分の作品の中ではその心理までティテールに表現しようとしたことがわかる。

## 5. 結論

一葉文学における古典の受容に関する研究は、日本の古典文学からのものが多く、他国の文学からの影響や受容関係のものは乏しいのが事実である。その中で、朝鮮文学の受容という研究を行うのは、一葉研究全般においても非常に重要な研究になるといえる。

特に、本稿では新しい視点で一葉が読んでまた写した『九雲夢』の原典は何か、また『九雲夢』は、一葉の作品にどのような影響を与えたかを解明するによって、一葉文学における朝鮮文学『九雲夢』の受容を検討してみたが、野口氏が断定した原典は「乙日本」ではなく「癸亥本」であることを明らかにした。これは、今までの研究ではあまり重要視されなかった『九雲夢』の筆写本であったため、一葉の写した『九雲夢』が「癸亥本」だと明らかになったことは、非常に意味のあることである。つまり一葉の写した『九雲夢』の原典が「癸亥本」になることによって、今までの研究を全く変える新たな結果にもなるのだ。また、野口氏が言及した『五月雨』『にぎりえ』の二つの作品以外、新たに『花ごもり』という作品にも『九雲夢』の影をみつけた。ただの影響に止まったのではなく、主人公楊少遊の男性中心の立場から離れ、女性に目を当てその細かい部分を取り出し、近代小説において一葉なりのものにして活かしたことがわかった。これは、一葉の文学における『九雲夢』受容の方法だといえるだろう。

『五月雨』『にぎりえ』『花ごもり』の三作品以外にも、その影響関係を持つ作品があるという可能性も含め、多くの課題も残る。その課題の中で、まずは、しばしば論じられる「『文学界』の同人や西鶴、秋成、露伴等に教示された「写実」の手法<sup>20</sup>」の受容が、『九雲夢』の写実的手法からも現れるというのを解明する必要がある。その上で、『九雲夢』という作品のもった思想とその影響関係を明らかにすれば、既存の研究にもう一つの写実的手法の系譜を作り上げることになる。

また、一葉の受容の特徴だけではなく、小説の

師・半井桃水の文学における朝鮮文学の受容関係を明らかにする必要がある。これは、それぞれの受容の比較によって一葉の受容方法の特徴を把握するとう重要な面もあるが、さらに朝鮮文学は『九雲夢』だけではなく、『春香伝』との影響関係も明らかにするという研究にもつながるので、一葉の受容においてもう一つの重要なテーマにもなる。以上のテーマは、今まで行われたことのない非常に重要な研究になるといえるであろう。さらに、日韓の比較文学に関しても重要な研究になる可能性があるので、今後の課題として行きたい。

### 【注】

- 1) 『樋口一葉事典』, おうふう, 平成11年10月, pp. 469~490参照
- 2) 野口碩『樋口一葉の「五月雨と朝鮮文学」』, 日本文学論及第54, 昭和61年3月
- 3) 佐藤慶子『樋口一葉文学における韓国古典小説の影響』, 日本学, 東國大学校日本学研究所, 1986年3月
- 4) 『東京朝日新聞』, 明治24年10月2日から25年4月8日まで150回連載。
- 5) ここで扱った一葉の日記は、小学館から発行した『全集樋口一葉』日記編(前田愛, 野口碩校注)である。1979年12月
- 6) 朝鮮関連の記事は、明治24年5月27日, 初めて登場して以来, 桃水と絶交したとはいえ, 27年6月20日までも続いている。
- 7) 塩田良平『樋口一葉研究』, 中央公論社, 昭和31年10月27日, pp. 342
- 8) 明治24年4月22日から, 25日, 26日の日記に, 小宮山の名前があがっているが, 実際, 一葉と小宮山が出会ったのは, 翌月の8日のことである。
- 9) 一葉の写した『九雲夢』は, 第三巻の「宮女掩淚髓黃門 侍妾含悲辭王人」の「…私家之事臣固不敢恩於…」まで書かれている。この部分は少遊が皇帝に対して決意の上疏文を書き上げる所謂婚姻尚書の内容である。この尚書の内容も最後まで行かず, ほぼ後半部で切れたことから, 何らかの事情で一葉の意志で書くのをやめたと予測するのだ。
- 10) 丁奎福『九雲夢』, 高麗書林, 1986年12月
- 11) 丁奎福『九雲夢』, 高麗書林, 1986年12月
- 12) 卞宰洙『朝鮮文学史』, 青木書店, 1985年2月
- 13) 野口碩『樋口一葉の「五月雨と朝鮮文学」』, 日本文学論及第54, 昭和61年3月
- 14) 野口碩『樋口一葉の「五月雨と朝鮮文学」』, 日

- 本文学論及第54, 昭和61年3月
- 15) 洪相圭『韓国古典文学選集2』「九雲夢」, 高麗書林, 1975年8月(この報告書に使う『九雲夢』の本文は, この翻訳本を使うことにする。
  - 16) 『樋口一葉全集』第2巻, 筑摩書院, 1994年
  - 17) 李政殷『一葉文学における「厭恋」の受容』, 人間社会環境研究第18号, 金沢大学大学院人間社会環境研究科, 2009年9月
  - 18) 『文学界』第14号(明治27年2月28日, 其一~其四), 第15号(4月30日, 其五~其七)に発表。
  - 19) 『樋口一葉全集』第1巻, 筑摩書院, 1994年
  - 20) 塚田 満江『鷄林情話「春香伝」をめぐって一統半井桃水考』, 女子大國文78, 1975年12月

\*付記

本稿は, 2009年度金沢大学大学院プロジェクト研究(「一葉文学における古典の受容」-朝鮮文『九雲夢』を中心に, 2010年2月23日発表)として支援をいただき行った成果である。本稿で使われた古典の資料はすべてプロジェクト研究の支援により集めたものである。一葉の写した『九雲夢』は, 山梨県立文学館を訪問した時, 筆者が直接撮影したものであり, ソウル大学所蔵の「乙巳本」や丁奎福(ジョンギュボク)氏の所蔵本「癸亥本」などの『九雲夢』は, ソウル大学中央図書館, 奎章閣国学研究所, 高麗大学大学院図書館, 国立中央図書館を各訪問し複写したものである。